

2.2 野沢菜

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	30	

※前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。

(1) 特徴及び吸収特性

野沢菜は**品質が重視**され、柔らかく、筋っぽくないものが好まれる。

このような野沢菜を生産するためには**一気に株を作り上げることが必要**とされる。

また、作付けが低温期に多く、肥効が現れにくいため多肥となりやすい。

野沢菜は**生育期間が短い**ため**基肥を主体**とし、肥切れを起こさないようにする。特に秋まき作型では収穫前に霜が降り、地力窒素の発現も少ない。**生育初期から肥料を十分に効かせて**一気に株を作り上げることがポイントである。目標収量は10a当たり4,000kgだが、通常は2,000～3,000kg程度である。養分吸収量は窒素成分で10～15kg/10a程度と考えられる。

作型によっても異なるが、現状では10a当たり窒素成分で30kg程度施肥されており、このうち基肥が2/3、追肥が1/3を占める。追肥は、播種後15日と30日ころの2回に分けて行う。